埼玉工業大学学生とボランティア
―科目「ボランティアの研究」の取り組みから―

永井　恵一

はじめに

埼玉工業大学（以下「本学」とする）には「ボランティアの研究」という科目があり，全学部学生向けに開講されている。工学部では一般共通科目のうち一般教養科目として，人間社会学部では教養科目のうちキャリア・デザイン科目として，いずれも１年生から履修可能である。ご縁をいただき，筆者は2022年度からこの科目を担当することになった。

コロナ禍では三密回避が不可欠であった。大学教育の場面ではオンライン授業が行われるようになり，LMS（Learning Management System，学習管理システム）の活用促進，学生の基礎的なICTスキルの向上につながった。SNSやオンライン技術を活用した課題解決の提案は学生のレポートによく見られるようになってきた印象がある。また，新しい生活様式として非接触や自動化のサービスがさまざまな場面で普及している。例えばホテル業界では自動チェックインをはじめとするスマート化が進められ，ウィズコロナへの対応，従業員不足の解消，時間やコストの削減による生産性の向上が同時に図られている。

時代の移り変わりを感じる一方で，アナログな価値や経験の機会は得難く，より貴重なものになったと感じられる。ボランティアもそのひとつである。社会への貢献，他者への貢献を前提とするボランティアにおいては，社会や他者との関わり方自体が制限されることで，これまでのボランティア活動の継続が困難な場合が生じた。筆者は本務校においてもボランティア科目を担当している。地元自治体と連携して地域の夏祭りに学生ボランティアを派遣していたが，夏祭りが中止となり，ボランティア活動の機会が失われ，ボランティア科目の内容を見直す必要に迫られた。2022年度になって地域のイベントが３年ぶりに復活するケースが見られるようになるなど，ボランティアの機会は回復傾向にあると感じられるが，今後どのようなボランティアのあり方がふさわしいかを議論する必要性があると感じている。

そこで本稿では，2022年度「ボランティアの研究」の実施内容を振り返りつつ，本学学生（厳密には「ボランティアの研究」履修学生）にとってのボランティアの位置付け，そして今後のボランティア活動の可能性について考察していきたい。

１．2022年度「ボランティアの研究」の取り組み

2022年度「ボランティアの研究」は，筆者の専門領域であるまちづくりと観光経営の観点から，ボランティアの実践に関わるような持続可能な発展（SDGs），ユニバーサルデザイン，リーダーシップといったテーマを取り上げた。その議論を教員と学生，または学生同士の対話により深めることを目的に，小レポートやプレゼンテーションの課題，または授業内でのグループワーク（ディスカッション）を実施して，主体的な学びと，双方向的な授業形態を目指した。

ここでは，学生から提出された小レポート，フィードバック等をもとにこの授業を振り返り，ボランティアとは何かを考察する。

１．１　ボランティアへの関心

第１回講義「ガイダンス」では，学生にボランティアへの関心の度合いを尋ねた。ボランティアが身近であるか，関心があるか，人と関わることが好きかどうかについて，前期履修者，後期履修者に同様の質問をして，その回答（前期57名，後期97名，計154名）を合算して集計している（図１）。

「あなたにとって，ボランティアは身近ですか？」の質問に対して肯定的な回答（とてもそう思う，まぁ思う）は66.2％であった。何らかのボランティア活動の経験があったり，現在関わっている学生の割合は必ずしも低いわけではない。

「あなたはボランティアに関心がありますか？」の質問に対する肯定的な回答は84.4％であった。人間社会学部の履修学生の回答（57名）では「とてもそう思う」が42.1％に上り，工学部の履修学生の回答（97名）の割合21.6％を大きく上回っている。身近であるか，関心があるかの２つの質問は同じような質問ではあるが，必ずしも相関が高いわけではなく，ボランティアを身近に感じながら関心の低い人，ボランティアが身近なものではないが関心が高い人も見られた。どちらにも共通するのは，学部別に見ると工学部学生よりも人間社会学部の学生の方が肯定的な回答の割合が高

く，有意な差が見られたことである。

「あなたは，人と関わることは好きですか？」の質問に対する肯定的な回答は75.3％であった。「とてもそう思う」の回答は３つの質問のうちで最も割合が高い。多少の違いは見られるものの，工学部と人間社会学部の学生の間に有意な差は見られなかった。

どちらの学部生も人と関わることに対しては同様であるにもかかわらず，ボランティアへの関心の度合いで異なる傾向が見られるのは興味深い。

表1　2022年度「ボランティアの研究」シラバス（抜粋）

概要（目的・内容）

この世界の先行きは不透明である。そこで生きていくために大切な考え方のひとつが「ボランティア」ではないだろうか。この講義では，SDGs，ユニバーサルデザイン，リーダーシップといったテーマを取り上げつつ，この社会におけるボランティアの意義や特徴をともに学び，考察する。それにより，各々が連帯感を持ち，社会課題の解決策を検討し，実践しようとする姿勢を養うことを目的とする。

授業方針

ボランティアとその周辺領域をテーマとして取り上げ，講義形式を中心に進める。アクティブラーニングの手法を取り入れ，可能な範囲でボランティアの実践，グループワークなどを行う。主体的な学びと，双方向的な授業形態を目指す。

学習内容（授業スケジュール）

1．ガイダンス　授業の進め方とアンケート
2．ボランティアとは何か（1）　これまでの経験を振り返る　＊
3．ボランティアとは何か（2）　ボランティアの意義と特徴　＊
4．ボランティアと地域社会（1）　持続可能な発展
5．ボランティアと地域社会（2）　災害とレジリエンス
6．ボランティアと地域社会（3）　社会課題を発見する　＊
7．ボランティアと福祉（1）　障害とは何か
8．ボランティアと福祉（2）　ユニバーサルデザイン
9．ボランティアと福祉（3）　心のバリアフリー　＊
10．ボランティアとは何か（3）　ボランティアに関わる人々
11．ボランティアの実践（1）　リーダーシップ
12．ボランティアの実践（2）　哲学と宗教
13．ボランティアの実践（3）　生き方をデザインする　＊
14．まとめ　＊
15．レポート作成

＊グループワーク（ディスカッション）を実施

学習到達目標

①ボランティアを身近なものとして捉え，実践することができるようになる。
②社会課題に関心を持ち，広い視野で捉えて考察し，行動に移すことができるようになる。

③自分自身にとってのボランティアの意義や必要性を説明することができるようになる。

成績評価方法
毎回の小レポート60%，中間課題20%，期末レポート20%

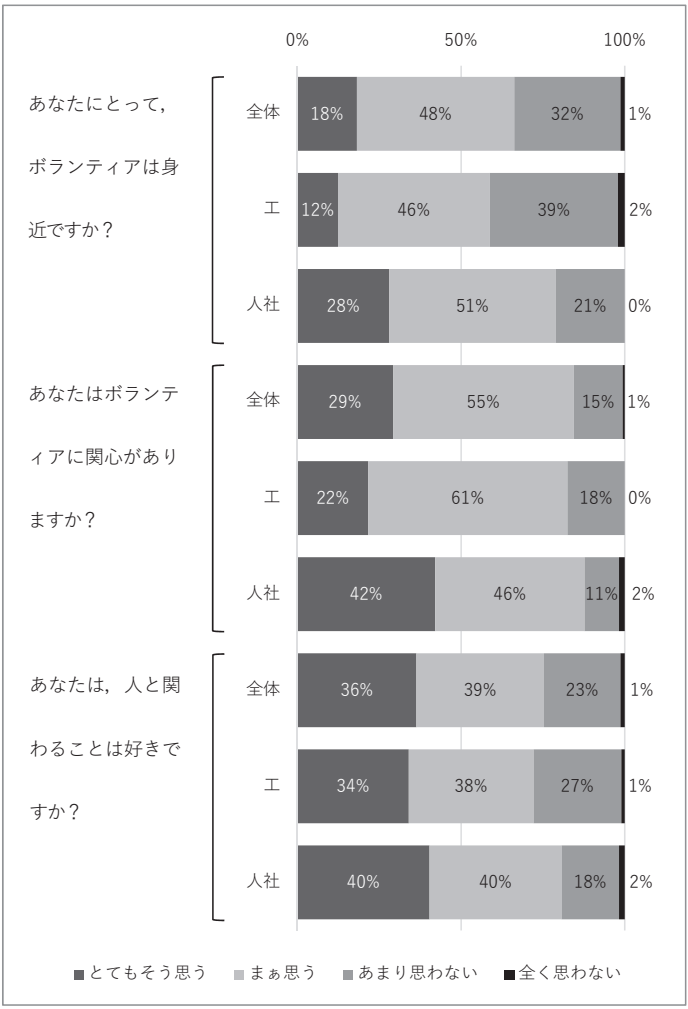

図１　第１回講義における履修学生へのアンケート（N＝154）

また，この３つの質問を１年生か，２年生以上かで比較すると（１年生69名，２年生以上85名），身近であるか，関心があるかの質問では，１年生の方が２年生以上よりも肯定的な回答の割合が高い結果となった。人と関わることが好きかでは差が見られなかった。この背景を明らかにできるような質問はしておらず不明であるが，専門的な学びが増えることでボランティアとの接点が減少したり，ゼミ活動やアルバイトなどで大学生活が充実してくることでボランティアに意識を割く時間が減少してしまうということだろうか。

１．２　持続可能な開発目標（SDGs）への関心

第６回講義「社会課題を発見する」では，自分自身の関心事や専門性と，社会課題とをどのように繋ぎ合わせボランティア活動に繋げていけるかを議論する回となった。社会課題の導入として持続可能な開発目標（SDGs）を題材とした。近年，日本におけるSDGsへの関心は高まり，17の目標のアイコンを至る所で目にするようになってきた。しかし，持続可能な開発ソリューション・ネットワーク（SDSN）「Sustainable Development Report 2022」によれば，日本が達成できている目標は３つ（４，９，16）のみであり，深刻な課題があるもの（６つ：５，12，13，14，15，17），重要な課題があるもの（３つ：２，７，10），課題が残るもの（５つ：１，３，６，８，11）が多くあることが指摘されている。

履修学生に「あなたが大切にしたいSDGs３つの視点（目標）を選択してください。」と聞いたところ，最も関心が高かったのは「14. 海の豊かさを守ろう」(36.3%)，次いで「３．すべての人に健康と福祉を」(31.9%)，「12. つくる責任 つかう責任」(27.4%)，「11. 住み続けられるまちづくりを」(24.4%)，であった。

海なし県の学生の関心が目標14に集まったことは意外でもあったが，学生の意見には「マイクロプラスチックによる海洋汚染が問題になっているのでそれを防ぐためにプラスチックの消費を日頃の生活から減らそうと思います」，「プラスチックごみの削減のためにマイバックだけでなく，マイボトルも持ち歩くようにしていきたいです」，「お皿を洗う際，お皿に付いたたれなどの油汚れをふき取ってから洗うようにしようと思いました。またポイ捨てをすると水にプラスチックが溶けそれを魚が食べると環境問題のみならず身体的問題になるので今後もポイ捨てをしないようにしようと

思いました」,「海上のゴミを拾ったり，海上のゴミを集めてバケツの中に自動的に回収する装置などにクラウドファンディングで募金するなど，自分にできることはたくさんあるので，実践していきたいと思った」という内容のものが見られた。2020年７月に開始されたレジ袋有料化や，近年のマイクロプラスチックの問題への関心が高いことが，この目標への関心の高さにつながっていることが分かる。

図２　履修学生が大切にしたいSDGsの目標（N＝135, ひとり３つまで選択）

１．３　グループワーク（ディスカッション）の実践

ボランティア活動では，受け入れ先があり，初めて出会った人と共同作業をする場面があることが少なくないと想定される。そのため，第11回講義では「リーダーシップ」をテーマに扱ったり，14回の対面講義のうち６回でグループに分かれディスカッションを行ったりと，学生の主体性とコミュニケーション力の向上を視野に入れた授業運営を行っている。

毎回ランダムに３，４名のグループをつくり，初対面だったり異なる学年の学生がいる状況をつくってディスカッションを行った。人と関わることが好きな学生が多いためか，各グループの議論は順調に進行することが

多く，本学学生のコミュニケーション能力の高さが窺われる。最初にグループワークを行う第２回の感想を見ると，「ディスカッションは大変に胃が痛かったです」とディスカッションへの苦手意識や，不安の声が見られる一方で，「話を積極的に進めてくれる人がいたので楽しくグループワークができた。自分もそうなりたい」，「ディスカッションは初めての人と話せるのがとても楽しかった。先輩，後輩の繋がりがとても広がるので積極的にやっていきたいと思った」，「ディスカッションはあんまりやったこともないし慣れないのですごく難しく正直最初はめんどくさいなと思っていたが，人と話す，コミュニケーションの練習にもなると思うし，会話の練習という点で就活の面接の練習にも繋がるような気がするので，ディスカッションは有意義な内容だなと思った」と前向きな意見も多く見られた。

１．４　講義のまとめ×グループワーク＝謎解き

第14回講義「まとめ」では，講義内で紹介した重要事項の確認と，あらためてリーダーシップやチームワークの大切さを再認識してもらうために《謎解き》を実施した。

謎解きはSCRAP社の「リアル脱出ゲーム」や，「謎解きクリエイター」の松丸亮吾氏の活躍により一般に広く認知され，観光地でのイベントから社員研修まで，様々な場所で活用されている。誰もがゲーム感覚で興味を持って取り組めること，目標を設定しそれに向けて協力する体制が自然と生まれることなどの効果が期待できる。授業で実施することで問題解決型学習となり，同時に授業で伝えたい要点を印象付けることができるなど，メリットが多い方法である。臨機応変な対応力など，ボランティア活動の現場で必要とされる能力を発揮することを擬似的に体験できるのではないかという狙いもある。

今回の《謎解き》はこの講義の復習用に作成したオリジナルのもので，講義でのキーワードが確認できるように構成している（図３）。これまでの授業配布資料を見返しながら問題を解き進めると「全員でピースしろ」という指示が現れ，それを実行することで（図４）最終問題に進み，目的意識を持つことが大切であるというメッセージに到達するという流れとした。

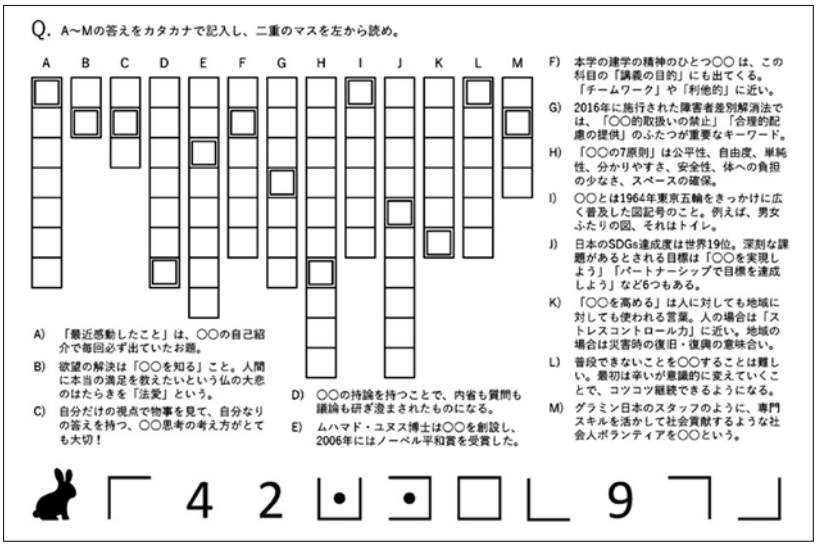

図３　謎解き問題シート

図４　謎解きに取り組む学生の様子

学生からは「率直に面白かったです。謎解きをする機会はあまりないので新鮮でしたし，内容も今までの授業で習ったものが出てきたので良い復

習になりました。調べないと分からないものがほとんどでしたが，それでも完全に忘れていたものはなく，「この時に出てきたな」「この間のレジュメに載っていたな」など覚えてるところも多くあり，しっかり自分の中で知識として身についてることに嬉しくなりました」，「いつものグループワークより，みんなのテンション上がっていて楽しかったです。謎解きをしながら授業の内容を振り返られて良かったです」と好評価であった。

２. 今後のボランティアの可能性

２. １　ボランティアの定義

埼玉県ボランティア・市民活動センターのWEBサイトでは「ボランティア活動は，自らすすんで，自分の考えで，自分の身近なさまざまな問題に取り組んでいく活動」であるとして「①自発性・自主性」，「②社会性・連帯性」，「③無償性･互酬性」，「④先駆性･創造性」の４つの特徴を挙げている。

文部科学省中央教育審議会（2018）「2040年に向けた高等教育のグランドデザイン（答申）（中教審第211号）」においては具体的にボランティアに関する言及は見られないものの，2040年に必要とされる人材として，「予測不可能な時代の到来を見据えた場合，専攻分野についての専門性を有するだけではなく，思考力，判断力，俯瞰力，表現力の基盤の上に，幅広い教養を身に付け，高い公共性・倫理性を保持しつつ，時代の変化に合わせて積極的に社会を支え，論理的思考力を持って社会を改善していく資質を有する人材」が，「変化を受容し，ジレンマを克服しつつ，更に新しい価値を創造しながら，様々な分野で多様性を持って活躍していることが必要である」（下線部は筆者による）と述べられ，ボランティアの特徴と符合する点が見られる。つまり，ボランティア活動の実践，またはボランティアについて考察することにより，ここで述べられている「21世紀型市民」の育成につながることが期待される。

猪瀬（2020）は，ボランティアの三原則として「自発性，無償性，公共性」を挙げ，これらに対する批判的な議論を紹介しており興味深い。例えば，大学生がボランティア活動により単位を取得できるとしたら，そしてそれが必修科目だとしたら，自発性や無償性の点でそれは本当にボランティアと言えるのかどうか疑問が生じることになる。しかしその科目履修をきっかけに，その後自発的に活動を広げる学生が生まれる可能性も否定できない。近年では「有償ボランティア」（交通費や宿泊費，最低賃金以下の金

銭的報酬等が支払われるボランティア）の概念も普及しつつある。ボランティアを必要とする人，ボランティア活動をしたい人，その橋渡しをする人により，多様な捉え方，しくみが生まれているのが現状であろう。

２．２　履修学生のレポートにみるボランティアの位置付け

「ボランティアの研究」最終レポートにおいて「自分自身にとって，ボランティアとは何か。ボランティアのこれまでの定義を批評した上で，あなたらしい再定義を」と求めたところ，次のような回答があった。２名のレポートを引用する。

・ボランティアはもっと身近であるべきだ。しかし，ボランティアを面倒くさいと感じるのはどうしてなのか。小学生のころ，昼休みや休日を使ってボランティア活動が行われており，ボランティア活動とは名ばかりに強制労働のイメージを植え付けられてしまっていたからではないのか。賃金が発生しないという点も人によっては疑問に思う点だと考える。ボランティアを積極的に行うためにはお金がどうしても必要になってしまう。それを自分のお金だけで何とかすることは，まず学生では無理だろう。その２つの点がボランティアを身近に見ることができない理由ではないかと考える。（心理学科１年）

・私にとってボランティアとは，自分にとって無理のない範囲で行う社会勉強である。ボランティアは，何かに困っていて助けを求めている人の要望を叶えるために行う行為のことであると，授業を受けて考えた。ボランティア活動に従事することで，実際の現場では何が求められているのかを確認できる。確認したことで社会にとって何をするべきかを自覚し，今後の社会貢献に繋がることから，ボランティアとは社会でするべきことを学ぶ社会勉強なのだと私は考える。（機械工学科３年）

前者の「ボランティアが身近なものではない」という意見からは，学生がボランティア活動に参加するハードルが低くはない現状が示唆される。大学での学びと関連するような身近な課題や，経済的に無理なく参加できるような枠組みが求められている。

また後者の「ボランティアは社会勉強だ」という意見も同様に，大学で身につけた専門性をどのように実社会に結びつけられるのか，そのことを学ぶフィールドを学生自身が求めている現状が読み取れる。

ボランティア活動は地域のゴミ拾いのような簡単なものから，災害ボラ

ンティアのような大掛かりで人命に関わるようなものまで多種多様である。本学学生にとって身近に感じられ，主体的に取り組めるような，専門性と社会課題の接続が重要課題である。大学での学びと関連するような社会課題が明らかになれば，共通の関心を持つ学友とともに前向きに取り組めるようなボランティア活動の枠組みや機会は作り出せるのではないか。そのような学びの進め方が，“2040年に必要とされる人材”の育成にも直結するのではないかと考えられる。

２．３　埼玉工業大学学生らしいボランティア活動に向けて

では本学学生にとってどのような社会課題が身近に感じられるだろうか。最終レポートでは「今後どのような活動に取り組みたいか」についても回答してもらった。

・私には，行動力，人脈を集めるコミュニケーションスキル，サーバ構築のスキルなど，他の人がなかなか持っていない能力を持っている自信があるので，これらのスキルを最大限活かしていきたいと考えています。具体的には，現在バーチャルリアリティ（VR）が盛り上がっており，今後各家庭にも普及する日が来ると予想しています。その時が来たら，メタバースのようなオリジナリティあふれる仮想空間を作り，遊びの場を提供したいです。（情報システム学科１年）

・私は将来，生活に身近な製品で人々の役に立ちたいと思っている。ユニバーサルデザインを取り入れることで，人々の役に立つ生活に身近な製品づくりができると思う。ユニバーサルデザインを学び，その発想から今後の自分のものづくりに活かして，社会貢献をしていきたいと思っている。（機械工学科３年）

・今までは人に直接かかわるボランティアが多かったので，自然環境の保全を目的としたボランティアに取り組みたいと考える。簡単に調べるだけでも多くのボランティアがあり，その中で興味がひかれたのは，地域の子どもたちに自然や緑の大切さを教える勉強会のようなものである。教職課程をとっていたのでその経験を活かして，私の力でもできるのではないかと考えた。また，研究室で得た花の知識を少しでも生かしていきたいと考えている。（生命環境化学科４年）

工学部の学生の回答はこのように，学科での専門的な学びとボランティア活動とを結びつけようとする姿勢が見られ，新しい興味深い活動が生ま

れるのではないかと期待できる。人間社会学部の学生にも，災害ボランティアや福祉施設でのボランティアなど，各学生の関心とボランティア活動とを結びつけた活動宣言も見られた。

これらの柔軟な発想を，いかに実践に移すか，学びの機会へと促して“2040年に必要とされる人材”の育成につなげられるかが，今後の大学の役割ではないだろうか。

おわりに

ボランティアについて学生とともに検討し，議論をするこの「ボランティアの研究」という科目を通じて，筆者自身がボランティアの意義深さと，重要性を再確認することに至った。本学の，ものづくりへの特色ある取り組みや地域に根ざした学びは，いずれ新しい時代のボランティア活動へとつながるだろうと期待される。本学「建学の精神」には，「３．学生，教職員及び父兄が一体となり，学園の理想発展をめざすことによって，若き日に連帯感を養え。」とあり，この達成の鍵となるのはまさにボランティア活動の実践であると言えるだろう。

筆者は本学で非常勤講師として１年を過ごしたばかりの浅学者である。学生，教職員及び父兄諸氏のご意見，ご批判をいただきながら，今後も本学におけるボランティアの発展に貢献していければと考えている。

参考文献

Sustainable Development Solution Network (2022). Sustainable Development Report 2022. p.252. https://www.sdgindex.org/reports/sustainable-development-report-2022/（2023年１月31日最終閲覧）

猪瀬浩平（2020）．ボランティアってなんだっけ？（岩波ブックレット）．岩波書店.

埼玉県ボランティア・市民活動センター．ボランティアとは. http://www.fukushi-saitama.or.jp/site/volunteer/learn.html（2023年１月31日最終閲覧）

文部科学省中央教育審議会（2018）．2040年に向けた高等教育のグランドデザイン（答申）（中教審第211号）. https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/1411360.htm（2023年１月31日最終閲覧）